



act 9

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト

JUNE 2012

K A B U K I

「惚れる」 歌舞伎に さあ、お立会い。

歌舞伎に惚れる。それは役者に惚れるということなのだ、歌舞伎好きは必ず口にします。隈取で描いた雄々しいメイク。誇張されたファッションに、ここぞというタイミングで発せられる台詞とキメの動き。すべては江戸時代から脈々と受け継がれている「型」ですが、演じる役者によって泣かせもし、笑わせもする。また男性が演じる、女性以上

に女性らしい、えも言われぬ「女形」の魅力。あの役者をもう一度観たい、その想いが歌舞伎を知る一番の近道なのだそう。音楽や舞、物語における叙情性やファンタジー。日本文化の粋を一堂に集めたと言っても過言ではない完成された芸術文化・歌舞伎。知れば知るほど心熱くなる舞台を、一度見に行ってみませんか？

色気と男らしさ



むき身

イケメン役の化粧「隈取り(くまどり)」。赤い隈取りは正義の味方、ヒーローで、中でも「むき身」と呼ばれるものはモテ指数高めで男らしいキャラに使われる。

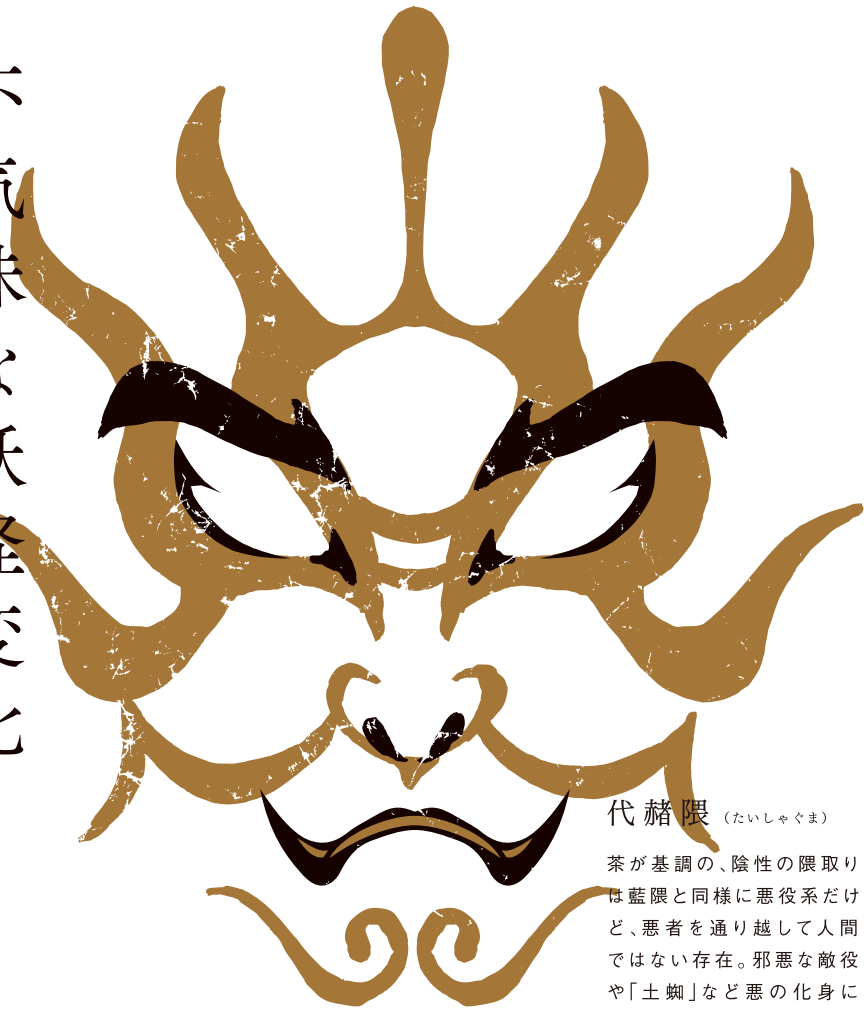
冷血な極悪人



藍隈(あいぐま)

派手な赤い化粧は正義や武勇を表し、スーパーヒーローに使われるが、対照的に藍色での表現は、冷血な悪者や怨霊の役に使われる。悪者の中でもボスキャラ級に多い。

不気味な妖怪変化



代赭隈(たいしゃぐま)

茶が基調の、陰性の隈取りは藍隈と同様に悪役系だけど、悪者を通り越して人間ではない存在。邪悪な敵役や「土蜘蛛」など悪の化身に使われる。

歌舞伎

K A B U K I

創始期から幕末まで

◆ 禁止されてはよみがえる、庶民の大人気芸能

歌舞伎が生まれたのは、戦国時代の終わり頃から江戸幕府が誕生した頃。長かった戦乱の世がようやく終わり、庶民は楽しみを求めていました。そこに彗星のように登場したのが「出雲の阿国」というナゾの女性。彼女の舞が話題を集め、1607年にはできたてホヤホヤの幕府の本拠地・江戸城に招かれるほど大人気に。流行に敏感なのは当時も今も女性を中心に、ブームにのった遊女たちが出雲の阿国をマネて、当時としては最先端の楽器だった三味線を使い「遊女歌舞伎」を舞いました。これまた全国的に大評判になったものの、きわどい芝居があったりアイドル女優を巡ってケンカが起きたりしたため幕府が禁止令を出すことに。それじゃあということで次に登場したのは美少年たちが舞い踊る「若衆歌舞伎」。ところがこれも当時は男色が盛んな時代だったので同じような騒ぎがおこり、これまたNG。女性も美少年もダメならと最後に登場したのがおじさまたちが踊る「野郎歌舞伎」。今でこそ歌舞伎は男性だけの世界になっていますが、それには紆余曲折があったワケです。その後、

江戸に市川團十郎(1660～1704)、関西方面に坂田藤十郎(1647～1709)という2人のスターが誕生し、江戸ではヒーローが悪者をやっつける「荒事」という歌舞伎が、関西では情にほだされるような「和事」やヒロインが登場する「女形」という芸が確立。歌舞伎は庶民の楽しみのひとつとして成長しました。江戸時代の前半・元禄時代には人形浄瑠璃でも活躍し「曾根崎心中」で有名な近松門左衛門(1653～1724)が、もう少し後の文政時代に「四谷怪談」で名をさせた鶴屋南北(1755～1829)などの優れた脚本家・演出家が登場し、ますます人気は上昇。

教文モノシリ博士のカブキなコラム

「幕の内弁当」

ゴマをかけた俵型の握り飯と、卵焼き、かまぼこ、焼き魚。一般的にはごちそうとはいいがたいけれども、ひとつのお弁当箱に入っていることでワクワクしながら食べられる「幕の内弁当」。実はこのお弁当は舞台転換の幕の間に歌舞伎役者が食べたのが由来といわれているんだよ。現在では歌舞伎座に行くと、たくさんのお店が並んでいるんな種類の幕の内弁当を

回り舞台や迫りなど舞台装置も進化をとげ、歌舞伎はどんどんと発展しました。芝居小屋の周りは時代を敏感に先取りする人々で賑わい、あたりに立ち並んだ芝居茶屋も大繁盛。俳優たちの浮世絵も今のアイドルのポスターと同じように売れていったようで着物にも歌舞伎から影響を受けたものがあつたぐらい、当時の歌舞伎というのは流行の最先端の芸能でした。

◆ 歴史からゴシップまで イイトコロをダイジェスト

歌舞伎の舞台となったのは、源氏や平家が活躍した平安時代から鎌倉時代、足利尊氏から始まった室町時代などが中心ですが、歌舞伎のファッションは江戸時代のものの基本になっていたそう。歌舞伎は「見て楽しくわかりやすければいい」という考え方なので、ヒーローは着物に綿を入れたり袖を大きくして迫力を見せたり、お金持ちで野暮なヤツは金ピカの成金趣味だったり、衣装だけ見てもなんとなく、イイモノとワルモノはわかるようになっています。話の中身も、現代でもありそうな内容が好まれたとか。金持ちの二丁の息子が家から追出された挙句に借金を重ね、ついには知り合いの女性を殺してしまう「女殺油地獄」や、店主から姪との結婚を迫られ、知らないうちに継母がもらっていた結婚支度金を取り返すが、その金を友人に貸したら返ってこずに、恋人の遊女とともに心中する「曾根崎心中」、織田信長と明智光秀をモデルに、上司のパワハラに絶えかねた部下がキレて上司を倒すために立ち上がる話「時今也桔梗旗揚」など。

どれも前もってあらすじさえ知っていれば、どんなシーンなのかわかりそうな話なので、かるく予習をしてから見に行ってみよう。

歌舞伎は
目と耳、舌で
味わうもの!



販売しているんだ。
役者が食べるというより

は、観客が幕間に楽しむのが主流。幕の内弁当以外にも手ぬぐいや小物など様々な物グッズが売っているよ。歌舞伎鑑賞には、観劇以外にもいろんな楽しみがあるから、ゆっくり一日かけて楽しむ、なんていうのもいいかもね。

5分でわかる歌舞伎の名作

『義経千本桜』

本筋を読む前に

頼朝VS義経、命がけの兄弟喧嘩

舞台は今から800年以上も前。源平合戦で平家を打ち滅ぼした源頼朝とその弟である義経。合戦場での義経の活躍に脅威を覚えた頼朝は、弟を都から遠ざけようと目論見ます。「義経千本桜」は、頼朝の目論見により都落ちすることとなった義経と、源平合戦に深くかかわった人々の物語なのです。

伏見稲荷鳥居前

物語の序章、見逃せない伏線がいっぱい

謀反の恐れありとみなされた義経はひとまず都から少し離れた伏見の稲荷神社まで逃げ延びます。それを追ってきたのは愛人の静御前。ここで義経と離れては今生の別れと思ひ、必死に道中を共にすることを願ひ出ます。しかし、人目を忍んで逃げなければならない道中に、「女は連れて行けない」と、義経は

キツパリと断ります。悲しむ静御前に、義経は千年生きたという雄狐・雌狐の皮でできた国宝「初音の鼓」を預け、必ず再び会おうと約束します。それでも諦めない静御前に業を煮やした義経の家来は、静御前を木に縛りつけ、一行は稲荷に参詣します。しかし、人気のなくなったその間に、追手が静御前に襲い掛かろうとします。そこを救ったのが、病気の母の看病をするため、義経のもとを離れていた家臣・佐藤忠信。義経は忠信に静御前の護衛を頼むと2人を残し、都を後にするのでした。

川連法眼館(かわつらほうがんやかた)

忠信がふたりに?! 紐解かれる謎の正体は!

川連法眼という位の高い僧のもとに身を寄せた義経を佐藤忠信が訪ねてきます。義経が静御前を救ってくれた礼を述べると、忠信は母の元よりまっすぐにここに馳せ参じたのでそんなできごとは知らないと言います。そこへ静御前とうもうひとりの忠

信が到着したと知らせが入ります。静御前は「忠信とは道中一緒だったが、ここにいる忠信とは少々着ているものが違う。忠信は鼓を打てばどんな時でも飛んでくる」と言って鼓を打つと、もうひとりの忠信が現れました。実は伏見稲荷に現れ、道中を共にしたのは、忠信に化けた子狐だったのです。「その鼓に使われているのは私の父と母の皮。鼓になっても父母が恋しく、ずっと後をついてまわっていたのです」と子狐。その話に胸を打たれた義経は、鼓を子狐に返すことにします。喜んだ子狐は舞を舞い、義経の身を守る約束をするのでした。

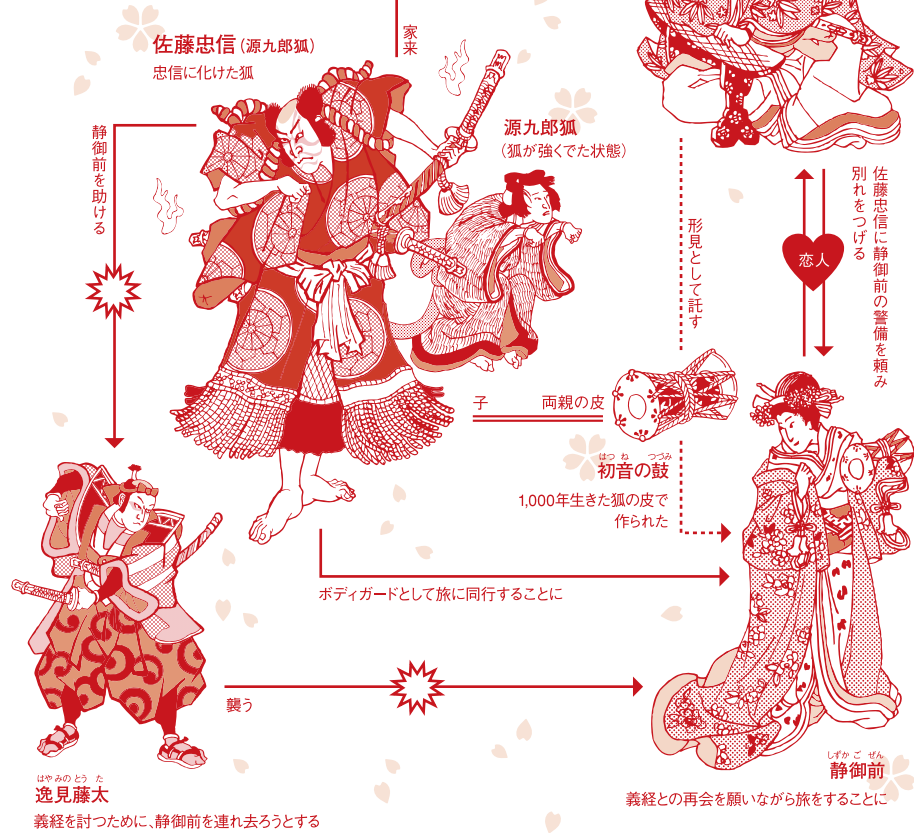
ここがポイント

最後の幕では「狐でさえも家族の絆はこんなに強いのに、血のつながった兄から命を狙われるなんて、なんと悲しいことだろう」と義経は嘆きます。場所も人も変わりながら何幕も続くこの舞台、「人と人の絆」という視点から観劇すれば、様々な形の絆が見えてくるかもしれません。

『義経千本桜』

伏見稲荷鳥居前～川連法眼館

人物相関図



君も使っているかもしれない?

歌舞伎用語集

【十八番(おほこ)】

初代・二代目・四代目の市川團十郎がそれぞれ得意としていた荒事の演目18種を、七代目市川團十郎が選んでこれを「歌舞伎十八番」といったことから、もっとも得意な芸や技のことを指すようになった。

【二枚目・三枚目】

一座を構成する配役の番付の上で、美男で人気が高い若衆役を務める役者を「二枚目」、面白おかしい役を務める道外方を「三枚目」に掲げていたことが語源。

【幕切れ(まくぎれ)】

それぞれの場(幕)の終わりに引き幕が閉まること。

【段取り】

うまく事が運ぶよう前もって準備すること。話の一区切りを「段」と言い、芝居の筋や構成の運びを「段取り」と言ったことに由来している。

【なあなあ】

馴れ合い、妥協を意味する。歌舞伎の掛け合いで、一方が「なあ」と呼びかけ、もう一方が「なあ」と言うだけで他に語る事がなく、顔の表情や仕草で気持ちを表現する見せ場が由来。

【鳴り物入り】

歌舞伎の舞台を賑やかにするため楽器の伴奏を入れることを「鳴り物入り」と言い、賑やかにしたり、景気をつけたりする意味から、大げさに触れ回ることをいうようになった。

【だんまり(暗闇)】

暗やみの中という設定で、登場人物が無言で探り合いながら戦ったり、物を奪い合ったりする定型の立ち回りやその場面のこと。

【黒幕(くろまく)】

舞台や場面の切り替えに、夜の場面を表す黒い幕を張った。その陰で舞台を操ることから、裏で操る人を「黒幕」と言うようになり、裏で計画したり指図をする人や闇の権力者の意味で用いられるようになった。

【見得を切る(みえをきる)】

歌舞伎役者が感情の高揚した場面で、一瞬動きを停止して、睨むようにして一定のポーズをとること。相手に対して、ことさらに立ち着いて男気のある態度を示すときなどに用いられる。「見栄」という字を当てる場合には、他人を意識して自分をよく見せようとする意味で使われる。

あの人もこの人も、意外と身近な 現代歌舞伎役者

k a b u k i a c t o r s

テレビや映画でよくみかけるあの人、実は歌舞伎役者かも?

歌舞伎の世界と私たちの身近なメディアを結びつけている、若手の歌舞伎役者を紹介します。

音羽屋

五代目 尾上菊之助

(1977年生)

「清潔な色気がある」と評される若女形。整った顔立ちで二枚目もこなす。姉は寺島しのぶ。商業演劇の演出家・蜷川幸雄氏と組んでシェイクスピアの名作「十二夜」を歌舞伎化した『NINAGAWA十二夜』を創り、海外でも高い評価を得ている。

中村屋

二代目 中村七之助

(1983年生)

幼少時より、ドキュメンタリー番組で兄・勘九郎との姿が取り上げられることも。鼻が高くキリッとした顔立ちで、やや寂しげな美しい女形を演じる。映画「真夜中の弥次さん喜多さん」や「ラスト・サムライ」にも出演し、活躍の場は多岐にわたっている。

高麗屋

七代目 市川染五郎

(1973年生)

若手花形の一人。父は松本幸四郎、妹は松たか子。多彩な演技力で古典から復活狂言、新作歌舞伎にも取り組み、映画や演劇でも活躍。歌舞伎界に新風を吹き込んでいる。舞踊も得意で、日本舞踊松本流の三世家元でもある。

萬屋

二代目 中村獅童

(1972年生)

歌舞伎の名門・小川家(旧播磨屋、現・萬屋)に生まれるが、父は歌舞伎をやめたため、歌舞伎役者として後ろ盾がない状態で役者を始め。バンド活動や映画、ドラマ、声優としても活躍し、新たな歌舞伎ファンを生み出している。

成田屋

十一代目 市川海老蔵

(1977年生)

NHK大河ドラマ、お茶のCMなどでもおなじみ。江戸歌舞伎の総本山・市川宗家の御曹司。パリ・ロンドン・ローマなどの海外公演でも名をあげている。眼力のある面立ち、通る声、スケールの大きな演技など、様々なメディアで注目される存在。

澤瀉屋(おもだかや)

二代目 市川亀治郎

(1975年生)

祖父は古典劇を復活させ、さらに「スーパー歌舞伎」を創出した歌舞伎の異端児・猿之助。祖父に負ける盾がない状態で役者へ情熱で注目されている。2012年6月に「市川猿之助」を四代目として襲名予定。